

巻頭言

神は私たちを赦された。私たち同士は？

立教新座中学校・高等学校チャプレン 倉澤 一太郎



イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。(マタイによる福音書第1章18-25節、新共同訳)

クリスマスの深夜ミサで読まれる福音書の一文、「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」が心に掛かりました。福音記者が「正しい」と評価する、それはどういうことなのでしょう。

当時の正しさの第一の基準はユダヤ教の律

法に合うか、否かにあると考えます。そうしますと、マリアに裏切られたことになるヨセフは、律法に背く行いをしたマリアを糾弾して正しい裁きを求めねばなりません。その場合、マリアは姦淫を行った娘として実家の戸口で町の人たちによって石で打ち殺されることとなります。惨いようですが、律法に規定されている以上、これを行わねば神との契約に背くことになり、行うことが「正しい」のです。秘かに離縁する選択はマリアとお腹の子ども生命は守られ、さらに町の人たちにも刑の執行とはいえ「人殺し」をさせないこととなります。おそらくヨセフの選択は、マリアの裏切りへの怒り、当時のユダヤ人男性としての彼の倫理観や価値観、そして律法に向かって正しい選り方を問いつける苦悩の果てに導き出した本当に重い答えだったことでしょう。

自分を裏切った婚約者であっても生命を守ることを第一に考え、さらに町の人に殺人を犯させないという、十戒にある「殺すな」の掟を守ることをヨセフは選んだことを、福音記者は「正しい」と評価したらしいと先ずは考えました。ですが、どうしても腑に落ちません。ヨセフの選択が本当に「正しい」のであれば天使がわざわざ彼にメッセージを届ける必要はないのです。天使が彼の夢に現れたのは彼の選択、人の思いを超える神の愛に基づく本当に「正しい」道を示すためです。

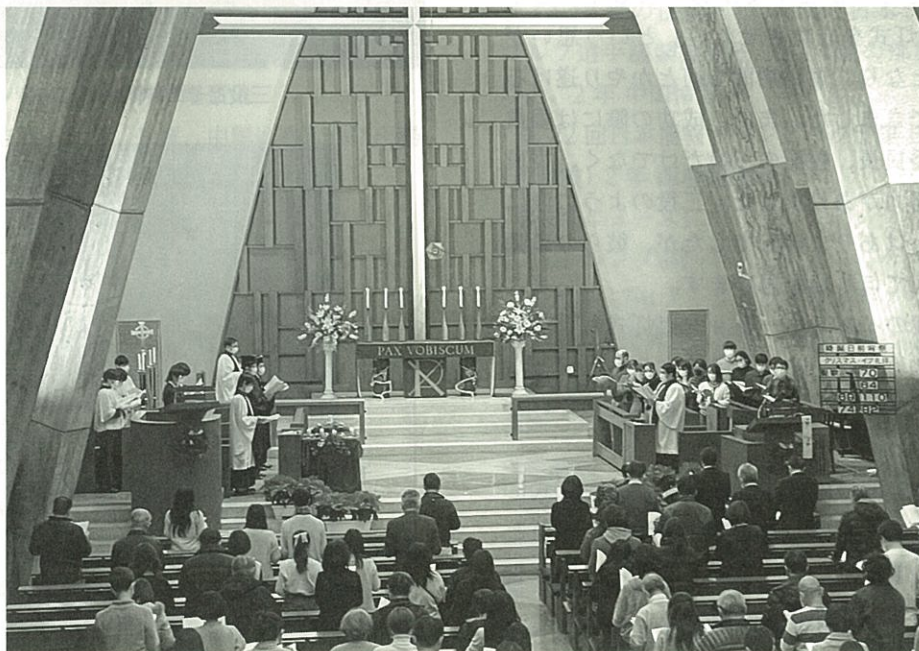
神の意は自分を裏切った婚約者を受け入れることでした。それは離縁＝マリアとの関係を断って彼女と子どもを生き延びさせるのではなく、彼女と子どもとを自分の家族として

受け入れて関係を結ぶことです。二人の生命を守りたく思うのならば、誰かに委ねるのではなくヨセフ自身で守りなさいと神は言われたのです。自分を裏切ったマリアを受け入れて守るには、マリアのすべてを赦すことが前提となります。すなわち神の意は裏切ったマリアを赦せということにあり、神は人と人が関係を断つことを望まれず、関係を結び続けることを望まれているのです。人が関係を結び続けるのに不可欠なことが「赦す」ということで、たとえ行き違いや意見・利害の対立から争い合いをすることになったとしても、許し合い＝仲直りすることを忘れないで欲しいと神は私たちに望まれていることが示されています。私たちは神の御手によって、相応しい賜物を与えられて造られており、それゆえにそれぞれが無二の存在として生きています。意見や価値観の相違は必然であり、衝突や喧嘩はあって当然です。神は人間のそのような在り方をよくご存じであるがゆえに、人の交わりにおいて赦し合いこそが関係を結び深めるのに不可欠であることを御子の

降誕に際し、ヨセフへのメッセージや羊飼いや東方の博士たちの拝礼を通して私たちにお示しになったのでしょうか。「インマヌエル＝神は共におられる」と天使に告げられた御子の誕生こそ、神が私たち人間と関係を保ち続けておられることの宣言であり、私たちに対して人間同士の関係を断つのではなく結び深め続けるよう望まれていることが示されています。

どんな理由があっても関係を断つことに正しさは無く、関係を結び深めるためにもがくことにこそ、神の意に合う本当の正しさがあるのです。2022年は相変わらず猛威を振るうコロナ感染症に加え、ウクライナ・ロシアの戦争など、人と人とを遠ざけ、関係を破壊する出来事が起き、終息の兆しすら見せていません。新しい年がより良き年になるには、今こそ神の生きたみ言葉に、この世に来られた御子の言葉と行いに聞き従わねばなりません。

衝突の後の赦し合い、仲直りのために働くことを神は私たちに求められています。



3年ぶりに開催された立教学院クリスマス・イブ礼拝（2022年12月24日、立教学院聖パウロ礼拝堂）